

海外との交流

学園長 矢野 恭弘

自由学園では、海外からの様々な方たちとの交流が行われている。米国、中国、韓国、ドイツの教職員の方たちの見学や、デンマークからの体操指導者の来校があり、米国、ドイツ、オーストラリアの生徒や学生たちの訪問もあった。今回は、そのような海外との交流の中で、英国からの英語助手プログラムとフィンランドの高校との交換留学プログラムについて述べたい。

I 英国からの英語助手

男子卒業生有志の寄付によって設立された「自由学園教師研修基金」によって、私は 1991 年の 9 月から 12 月まで、英国の中等教育視察のため英国に滞在した。Charterhouse という 1611 年に創立されたパブリックスクール（イギリスの私立中等学校、5 年制と 7 年制の学校がある）のゲストハウスに一室を得、そこを拠点にパブリックスクールを中心に 25 校を訪問した。

バーミンガムにある King Edward's School (1552 年創立) を見学したことが縁で、その卒業生であるジョン・ポール君がギャップイヤーを利用して自由学園に来たのが 1993 年の春だった。

ギャップイヤーというのは、英国にある制度で、高等学校卒業から大学への入学、あるいは大学卒業から大学院への進学までの期間のこと。1 年間アルバイトをして勉学の資金を貯めたり、インターンシップ等の職業経験をしたり、ボランティア活動をしたり、あるいは海外旅行などをして見聞を広めることができる。

この 23 年間に、10 校から 24 人の青年がやってきた。(24 人のうち、一人だけ例外的に、高校卒業直後のギャップイヤー期間ではなく、ケンブリッジ大学在学中に 1 年間来日した青年がいる) 以下にその人たちの氏名と滞在期間、出身校名とホームステイを引き受けてくださったご家庭のお名前をあげる。

- John-Paul Temperley 1993 年 3 月～8 月
King Edward's School, Birmingham
at Mrs. Koyama
- Thomas Heneker 1993 年 10 月～1994 年 8 月
Charterhouse
at Mrs. Kikuchi
- Tim Marsden 1994 年 9 月～1995 年 8 月
Charterhouse
at Mrs. Ogawa
- Rupert Ireland 1996 年 4 月～7 月
Harrow School
at Mrs. Era
- Alex Flyth 1997 年 1 月～7 月
St. Paul's School at Mrs. Sakurai
- Marie Tabor 1998 年 9 月～1999 年 6 月
Haberdashers' Aske's School for Girls
at Mrs. Yamano
- Tom Jones 1999 年 1 月～7 月
St. Paul's School at Mrs. Arai
- Leonard Picardo 2001 年 4 月～7 月
St. Paul's School at Mrs. Ohtsuka
- Sachiko Taoka 2001 年 4 月～7 月
Channing School
at Mrs. Katsumata
- Jonny Lloyd 2003 年 1 月～7 月
St. Paul's School at Mrs. Sakurai
- Kento Taoka 2004 年 9 月～2005 年 3 月
Haberdashers' Aske's Boys' School

at Mrs. Hotta & College Men's dormitory
Mark Stanford 2005年9月～2006年7月

Cambridge University

at College Men's dormitory

Adrian Coveney 2006年1月～7月

Haberdasher's Aske's Boys' School

at Mrs. K. Kimura

Tom Risdon 2007年1月～7月

St. Paul's School at Mrs. Hirose

Michael Sunda 2007年9月～2008年7月

St. Paul's School at Mrs. K. Kimura

Andrew Maloney 2010年9月

Christ's Hospital

at Mrs. Nishimura

Mita Suri 2011年4月～7月

Haberdashers' Aske's School for Girls

at College Women's dormitory

Alex Arbis 2012年9月～11月

Winchester College

at Mrs. Nishimura

Alex Shaw 2013年4月～7月

Winchester College

at Mrs. Tachibana

George Garrett 2013年9月～12月

Winchester College

at Mrs. Kumagai

Jacques Cockell 2014年4月～7月

Winchester College

at Mrs. K. Kimura

Inigo Carro 2014年9月～2015年3月

Winchester College

at Mrs. Yamamoto & at Mrs. An'oku

Zachary Tiplady 2015年4月～7月

Winchester College

at Mrs. Watanabe

Roderic (Bertie) Robertson 2015年9月～12月

Winchester College

at Mrs. M. Kimura

ホームステイを引き受けてくださったご家庭は、

在校生の父母、卒業生の父母、教職員などで、中には複数回快く受け入れてくださった方々もおられる。また、最高学部生の寮である記念学寮や光風寮に滞在し寮生との交流を深めた人たちもいる。

彼等の滞在に要する食費や部屋代は、自由学園で長年数学を教えておられた安部道雄先生が遺してくださった基金（安部道雄記念国際交流基金）の果実を利用して賄われている。

基本的には、女子部・男子部・学部の英語の授業の助手を務め、解散後（放課後）に、有志の生徒や学生のために英会話の時間を担当することもある。普段は各部の食堂で昼食をとっている。また、男子部の遠足（登山）に付き添ったり、ラグビーなどのスポーツに参加する英語助手もいた。

イギリスの高校在学中に日本語を少し学んだ青年もいるが、多くは日本語を話すことも読み書きもほとんど初心者という人たちだ。滞在中には、日本語の個人授業を受けている。日本に対する興味を持っており、東京都内の名所だけではなく、京都や広島へ旅行したりして、日本人と日本文化（日本食を含む）を好きになって帰っていく。

イギリスの大学を卒業後、日本と取引のある企業に就職して、日本で経験を生かしている人たちもおり、日本人女性と結婚した人も2人いる。

学園の生徒たちにとって、身近に英語を通して親しくなる若者がいることは、良い刺激になると共に、自由学園や日本を好きになって英国に帰っていく青年たちが増えていくことも嬉しい。

2012年9月から Winchester College からの青年たちが来校している。それは、1981年の9月から1年間女子部で英語の助手をした Benedicte Ivy さんの提案によるものだ。彼女は、1896年創立の全寮制の女子高である Wycombe Abbey School を卒業し、オックスフォード大学の Keble College に入学が決まっていた。1年間のギャップイヤーを利用して日本に来たいと願い、私が Keble College で学んでいたことが縁で紹介されて来日した。その彼女は、ご自分の自由学園での経験をご息子の Jacques にもさせたいと願い、彼が学ぶ Winchester College と自由学園をつないでくださった。

自由学園からも生徒を英国に送れないかという希望を *Benedicte* に伝えたところ、彼女は校長先生と話をし、前向きに検討してくださることになった。2014年12月に私が *Winchester* を訪問し、校長の *Dr. Townsend* と相談をし、まずは2、3週間の短期留学生として受け入れてくれることになった。

2015年の11月下旬から、約3週間、男子部高等科2年の2人の生徒が *Winchester College* に短期留学することになっている。男子部の生徒がイギリスのパブリックスクールの生活を経験できることは、非常に楽しみでよい刺激を受けて戻ってくるのが期待される。あちらでの授業料、食費、寮費等はすべて *Winchester College* が負担して、こちらは往復の航空運賃のみご家庭に負担していただくことになっている。

II フィンランドの高校との交換留学

2013年12月に自由学園を参観されたフィンランド日本文化教育協会の理事長ヘイキ・マキパー博士が自由学園の教育に感動され、帰国後フィンランドの高校と自由学園との交換留学制度を提案された。そして2014年夏に、フィンランドのアラヤルビ高校とフィンランド日本文化教育協会と自由学園の3者が教育面で協力するという覚書を締結し、交換留学が始まった。

アラヤルビ高校は、ヘルシンキから300キロほど北にある *Alajärvi* という人口約1万人の市の湖畔にある、生徒数約200人の男女共学の公立高校（フィンランドではほとんどの学校が公立）で、附属の中学校や音楽学校もある。アラヤルビの町は、フィンランドで有名なデザイナー・建築家の *Alvar Aalto* の活躍した場所でもあり、市庁舎等彼が設計した建物や、家具・ガラス製品などで知られている。

2014年度2学期の始業式（9月1日）から3学期の終業式（3月24日）まで約7ヶ月間、アラヤルビ高校2年生の17歳の女子生徒 *Kaisa*

Haapaniemi が女子部高等科2年生のクラスで学んだ。彼女は3軒の在校生や職員のお宅にホームステイでお世話になった。日本語を少し勉強してきていたカイサに、日本語の個人授業を用意したが、通常の授業についていくのはかなり難しかった。英語はよくできたので、クラス担任の英語教師と英語のできる同級生に助けられ、料理や掃除等も一緒にし、美術や音楽ではなかなかよい才能を発揮していた。体操が苦手ということで、まだ生活にも慣れていない10月の体操会にはクラスメートと同じように参加して、東京芸術劇場のステージで歌うことができた。

こちらからも生徒をフィンランドに送るため、私が12月上旬に現地を訪ね、市の教育長や校長先生はじめ担当の先生にも会い、授業参観もして様子を確かめてきた。

ほとんどの授業はフィンランド語で行なわれているが、学園生が訪問中は英語で授業をしてくださるといふ提案もいただき、こちらからは3学期を終えた春休みの約2週間、多くの希望者の中から選抜された3名の女子部高等科2年生を現地に送ることになった。

3月25日出発、4月7日帰国という日程だったが、3人の生徒たちは、ゆったりとした時間を過ごしてきた。英語で自由学園の説明を全校生徒向けにしたり、授業や現地のイースターのお祭りや工場見学を経験したりして、友情を育み視野を広げる体験をして帰ってきた。

2015年度は、フィンランド側と相談をして、こちらからは春休みに、あちらからはあちらの夏休みになる6月下旬に、それぞれ2週間か3週間の交歓をしようと話しているところである。

フィンランドの生徒の日本滞在費用については、前述の安部道雄記念国際交流基金から支給し、学園生の現地滞在費用はアラヤルビ高校側が負担し、それぞれ往復の航空運賃は各家庭で負担してもらうことになっている。

まだ始まったばかりの交換留学生プログラムだが、お互いに仲よくなって友情を深めることからお互いの国や文化を理解すること、また、英語を

はじめ外国語の勉強への意欲が増すことが期待される。